

## Representations of Aggression and Their Dynamics in D. H. Lawrence's Fiction

大山 美代

D・H・ロレンス (D. H. Lawrence, 1885-1930) を、人間愛に満ちた作家と捉える見方は一般的には稀有なものであり、ヒューマニズムへの批判や反キリスト教、性的自由の喧伝などの、独特な思想による過激な表情しか知らない読者があまりに多い。しかし、ロレンスの思想の根底にあるのは、歴史や文化によって構築された社会的自我に縛られた人間の現状を憂い、知性偏重の文明的な価値観を壊して、階級格差によって確執を生む人間関係の解体と再構築に取り組もうとする、熱意に満ちた姿勢である。したがってロレンスは、知性によって抑圧されてきた「肉体的意識」を目覚めさせることによって、近代社会に縛られた自己を「再生」し、新たな人間関係の創造をめざした、人間の未来への洞察に満ちた作家であると言える。以上のことを明らかにするのが、本論文の主たる目的である。ロレンスが「肉体的意識」をしばしば「動的意識(‘dynamic consciousness’)」と呼んでいることは見落とされがちであり、本論文ではその「動的」という概念こそ、ロレンスの思想の真髄であることを新たに提案した。そして、人間本来の「動的」あるいは「攻撃的」なエネルギーが発揮される時、固着した自他認識に「動き」が与えられ、知的意識によるものの見方が覆されることへの期待が、彼の著作を通じて貫かれていることを主張した。フロイトやニーチェといった同時代の思想家たちが、攻撃的エネルギーは人間の根源的本能であると述べているように、ロレンス作品においてもまた、抑圧された攻撃性が解放されることによって、社会的自我から躍動的に離脱する瞬間がみられる。それに加えて本論文では、「動的意識」の力によって、社会的差異により隔てられた他者との関係が動的に架橋され、停滞した古い人間関係が刷新されるという、ロレンスの作品を駆動するダイナミズムについて、精緻な作品分析を通して論じた。

本論文は、序章と、4つの章からなる本論、そして結論によって構成される。ロレンスの短編小説を中心に、作家自身の思考の道筋を、20世紀の思想家や精神分析学者の理論を参照しながら論じた。

‘Unrepresentable Experiences in the Early Works’ と題した第1章では、初期作品において、

ロレンスが人と人との関係に求めた変化や動きとは、具体的にどのような現象であり、何をきっかけとして人の「動的意識」は目覚めるのか、という点について多角的に論じた。それは、登場人物が知性的な表象行為から離れて、身体感覚に直接訴える情動やエピファニーといった現象を体験することによって、社会的差異にもとづく差別的意識をはらんだ人間関係が、結果として動的に架橋されていくというものであった。また、作品中に表れる情動とエピファニーが先行研究において混同され、違いが明確に示されていないことを問題視し、それぞれの定義と相違点を明記した。ロレンスが情動とエピファニーの違いを認識したうえで、互いを組み合わせているという指摘は、本論文の独自性である。さらに第4節では、作品中に自己の「死」と「再生」という状態が作り出され、その狭間で、既知の自他認識の解体と、脱自による他者との恍惚的交流が行われることで、未知の関係が創造されることを、バタイユの「内的経験」論に照らしながら論じた。

‘The Ambiguity of “Stillness” and Finding a Remedy in “Aggression”’と題した第2章では、本論文の軸である攻撃性や動的エネルギーの激しさと対をなす、「静（‘stillness’）」や「不活性（‘inertia’）」という概念に着目した。第一次大戦の時期に書かれたロレンスの中期作品においては、登場人物が「静」の境地への到達を理想とする語りが顕著である。しかし、他者と交流する欲望を持たず、不活発な状態であることが、肉体と精神の「再生なき死」を引き起こすことに、作品における主人公の死が警鐘を鳴らしていると言える。その状態が過度の‘stillness’や‘inertia’と結びつくとき、母体と胎児の一体状態のような充足感へと戻ってしまい、個人の自立性が奪われ、主体的に他者と関わる欲望をなくさせる偽の快樂へと人を陥らせるということが、作品の中で示されていると指摘した。よって、ロレンス作品において「肉体的意識」は動的な空間の中で発揮されねばならず、さらに、個が自立して他者存在に積極的に挑み続ける必要性が逆説的に提示されている、という新たな解釈を展開した。

‘Facing the “External” Others in the Late Works’と題した第3章では、後期作品において、近代西洋文明の外部の価値観を未だ有する「外的他者」たちとの接触を通してイギリス人主人公が経験する、積極的な生命力のやりとりについて論じた。‘The Woman Who Rode Away’ (1925)のように、民族的他者たちの恐怖性が強調され、彼らが西洋人女性のアイデンティティや意志の力を剥奪して、自己滅却的で受動的に変化させていく寓話が存在することから、先行研究においてはこのような異人種間関係を、ロレンスの民族差別、

あるいは女性蔑視の表れとみる非難が根強い。しかし本論文では、*St. Mawr* (1925)の中で、強者に対する弱者の「ルサンチマン的な攻撃性」と「自然の本能的な攻撃性」の是非が問われていることを足がかりに、それぞれの攻撃性についてのロレンスの考えをニーチェの思想と比較しつつ分析することで、ロレンスがポストコロニアリズムと社会的ダーウィニズムの文脈を超えて、多元的生命の共生への道を模索していたことを論じた。そして、西洋人、植民地の人々、動物という異なる種の有機的な共存を可能にさせるものは、他者同士が「個」としての生命力を示し合うことで、相互的にエネルギーを交換するような関係性である、と結論づけた。それは、互いの差異を打ち消しあうのではなく、逆に際立たせることによって相手を圧倒し、生命主義のレベルで関係を再構築していくという、攻撃性による積極的な共生が説かれていることを立証するものである。

‘Discovering the “Internal” Other and a New Vista on Human Relationships’ と題した第4章では、地理的な外部世界からイギリスへと視点を戻し、これまで外的他者の中に潜むとされ、恐怖を喚起してきた「暗黒の部分（‘dark place’）」が、実際には人間の肉体の内部に初めから存在していたもの、すなわち「内的他者」であったことを、ロレンスの思想から明らかにした。このことから、人間の自意識の内部の肉体的な感覚、そして人間が作り出した近代西洋文明の内部が、動的に攪乱されることによって再生しうる可能性を信じるロレンスの態度が、作品を包括的に分析することで明らかになると論じた。さらに、「動的意識」による交流の持続し難さという問題がこれまで未解決であったのに対して、ロレンスが*Lady Chatterley’s Lover* (1928)の中で「肉体の慈悲（‘bowels of compassion’）」という観念を提示することによって、男女の関係が瞬間的結合にとどまらず、永続していくための道を最後に導き出したことを論じた。

ロレンスは、人間の生命力の源である攻撃性の積極的価値を引き出すことに力を注ぎ、その動的エネルギーこそが、「他者」性を過剰に意識する近代社会における知性や精神の拘束を打ち破り、人間の未来を作り出していく力を持つことを説いたと言える。ロレンスのテキストにみなぎる攻撃性のダイナミズムとは、近代の悪習への反動、そして、構築された既存の認識的枠組みに対する反作用的な力として働くものでありながらも、停滞した近代人の意識の内部に「動き」を与え、平和と共生へのラディカルなアプローチを図るものである、と本論文の終わりに結論づけた。